

再発見・牛久第十八話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

小川(芋銭)家系譜⑩

佐々木・木村・小川

西郷隆盛が牛久宿本陣に立ち寄る

小川芋銭が牛久藩士の父賢勝からの口伝

水戸方面への往きか復りに

— 明治元年(1868年)に —

芋銭の父賢勝からの口伝の要点は次のようだ。

一年譜(西郷関係の資料)には出てないかと思いますが、父の話によりますと、明治元年に西郷隆盛が水戸方面への往きか復りに、牛久宿の本陣に休憩のため立ち寄ったそうです。その時の西郷さんは官軍の参謀ですから、小藩の牛久としては、もう怖い恐ろしい存在です。それで藩の主だった者が揃ってごきげん伺いに本陣へ出頭しましたところ、西郷さんは大きな声で「一同のもの、勤皇のことは承知であるうなア」とおっしゃって、あたりをじろっと見回したそうです。出頭した面々は、ただもう「へへ……え」と頭を下げるばかりだったそうです。

大総督軍参謀西郷隆盛

慶応4年(この年9月8日に明治に改元)1月7日の夜、新政府総裁(総理大臣に相当する)有栖川宮熾仁親王が小御所

(御所内)に公卿と諸藩主を集め、「徳川慶喜は朝廷を欺く大逆無道の敵」と断じて、その追討令(討ち取ることを発した。ところが、その直後に、明治天皇の叔母にあたる静寛院宮(和宮)。熾仁親王の許婚。前々將軍家茂未亡人)が侍女の土御門藤子を上京させ、参与岩倉具視に「慶喜助命と徳川家家名存続」の直書を差し出させて、寛典論による寛大な処分の内旨(内々の沙汰)を得た。慶喜の寛大な処分の背景には、慶喜の生家水戸徳川家の第二代光圀が尊王敬幕の思想に立ち、大日本史の編さんに着手し、皇統は南朝を正統としていたことと、慶喜の生母文明(登美宮吉子。水戸藩第九代藩主斉昭夫人)の父は南朝系の有栖川宮熾仁親王(新政府総裁熾仁親王の祖父)であったことが挙げられよう。

一方の旧幕府では、2月11日の江戸城内における旧重臣会議の席上で、慶喜が若年寄大久保一翁と陸軍総裁(または軍事取扱)勝海舟に諸事を任せ、その翌日上野寛永寺の塔頭・大寺院の書院(葵の間)に入り、以後ここにもって謹慎した。(大久保の発議によつて慶応3年10月に徳川第十五代將軍慶喜が朝廷へ大政を奉還した。大政奉還は坂本竜馬らにも多大な影響を与えた)

新政府では、総裁の熾仁親王が、東征大総督軍の大総督に任命されて、参内(内裏(天皇の住居)し、明治天皇より、錦旗(朝敵を討伐する官軍標章)と節刀(天皇の権

限を代行する意味を持つ)を授けられた。2月15日、薩・長など22藩の藩兵で編成された五万余の東征大総督軍が京都を立つて東海・東山・北陸の三道を江戸へ進撃を開始した。

東海道を進撃する大総督軍の本隊は、3月5日に駿府城(現静岡市)に着き、ここに本営をおいた。参謀の西郷隆盛は、大総督有栖川宮親王に「3月15日に江戸城を総攻撃するよう」進言し、決裁後に全軍に命令した。

前將軍慶喜は、3月6日に、自分の謹慎の地と江戸城明け渡しなどについて、大総督軍参謀西郷と談判するため、自分の警衛にあつて旧幕府精鋭隊頭取山岡鉄舟を使者に立てた。もう一方で慶喜は、寛永寺座主の輪王寺宮親王に大総督軍の本営に行つて、大総督有栖川宮親王と会い、江戸百万市民のために江戸城無血開城と兵火を回避する懇請をしてくるように依頼していた。山岡は、3月9日に大総督軍本営に着き、西郷に面会を申し入れた。半日余りの西郷・山岡両者の巧みな駆け引きがあつた。その結果、公式に西郷・勝会談が行われることになった。

3月13・14両日の江戸薩摩藩邸における西郷・勝会談では、「江戸城無血開城と慶喜の水戸での謹慎」などが決まつた。

ところで、これより14年前の安政元年(1854年)、西郷が28歳のとき、水戸藩江戸小石川の中屋敷において、慶喜の父で同藩第九代藩主徳川斉昭の側用人藤田東湖に出会つた。東湖は24歳のとき、藩主斉昭のもとで郡奉行に挙げられると経世済民に留意した。水戸藩は光圀以来の水戸学といわれる尊王攘夷思想の発祥地。東湖著『回天詩史』は「三度死を決して而して死せず、

二十五回刀水を渡る』で始まるが、これが諸国の尊王攘夷の青年思想家たちに多大の感化を与えた。もう一方東湖著『弘道館記述義』には尊王攘夷が記述されてあつた。そもそも水戸学という尊王攘夷は、光圀以来の尊王敬幕を基本理念としていた。諸国の志士らが唱えた尊王攘夷は、非常の時局の中で、倒幕運動さらに討幕運動のスロウガンに掲げただけであつたのだ。

東湖の人物像を熊本藩出身の横井小楠は「其人弁舌爽やかに、議論甚密(中略)色黒の大男、中々見事なり」と、西郷は「天下真に畏るべき人物無し、ただ其の真に畏るべきものは東湖あるのみ」とそれぞれ評している。東湖は翌安政2年(1855年)10月の江戸大地震(マグニチュード6.9。関東大震災は7.9)に遭い、小石川の中屋敷で圧死した。

折しも、次期(14代)將軍候補に慶喜を担ぐ老中首座阿部正弘、水戸藩主徳川斉昭(慶喜の父)、越前藩主松平慶永、宇和島藩主伊達宗城、薩摩藩主島津斉彬らと、紀伊徳川家の家茂を擁立する勢力が激しく争つた。西郷も斉彬の命令で越前藩士橋本左内らと慶喜擁立に奔走するが、阿部急死後の安政5年に大老に就任した井伊直弼によつて家茂が將軍継嗣に決められたのであつた。



西郷隆盛(写真提供：鹿児島市立西郷南洲顕彰館)